

913.5  
二  
32(上)

口  
名  
本  
子



三十二編上

紫田屋梓第卅  
 儂舍鶴画貞三  
 氏源彦作國編  
 柳亭種歌川上



儂紫田舎源氏第三十二編

羽三重の緒の最上あれども兩衣ふあてらんあゝ兜羅綿小ぶまか  
 縮緬の前垂も心を扱ふふあてらんあゝ本綿程用はるまじ野良  
 柳子の武家の兼鷹より今小鷹らむ赤裳衣ひきと縁をうられ  
 万葉時代も長襦袢の縁るし事必せりまは色も地りひも  
 ありあれはふ及事ありとい知りるる足利緒で五の衣を仕  
 かやう不兼下もさうくして十二重の十二年續きそ女巻小  
 至り五節の舞の衣裳ふこまより大原糸の田舎模模極又雪  
 物音の巻の男踏袴と後河のたせ玉葛の筑紫糸をあらん  
 見れども原本雅言の借物あれは横堅と採糸をあらん  
 書房の是をうへまふせんとい急ぐも

天保十年庚子孟春

柳亭種彦誌

あまのの  
大原野の

まつ  
祭

仁壽元年

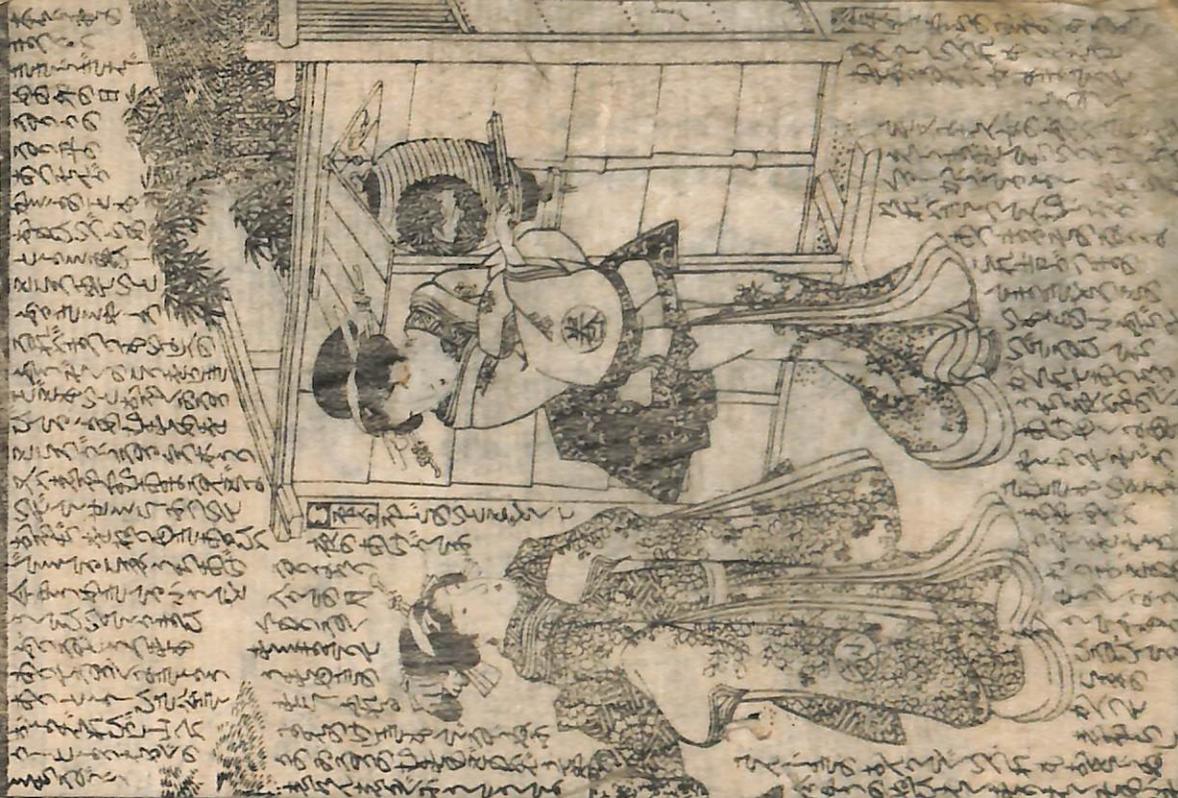
辛未三月一日

乙卯の日

あめ



▲このあとあまのれ最ふのき神事  
あまのれ  
藤氏の后宮へくるを  
行啓あじとを







かきく  
むまのあつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを

あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを

あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを



あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを



あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを

あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを



あつたまの  
いりのなれまの  
七和四十一  
からんをまを  
こくまを













十二編下

913.5
=
32(F)



其  
高  
下

其  
高  
下